

## 編集後記

特集「保護する責任の実践—NATOによるリビア介入を事例に」は、2012年6月に本研究所で実施した研究会での議論を中心に書き下ろされた論考からなる。深夜まで続いた研究会の中で、編集委員の熱い想いはアルコールという物理的な力へと姿を変え、執筆者諸兄を奮励し、本号が完成した。命の水に感謝したい。

本特集の諸論考に関する詳細な内容については、本文と緒言を直接参照願いたい。ここでも簡潔に紹介しておきたい。まず、千知岩正継氏の論考「リビア紛争に対する保護する責任（R2P）の適用？」では、国際社会の責任の曖昧さが論じられており、眞嶋俊造氏の論考「「保護する責任」概念の変遷における強制的軍事行動のあり方について」では、jus ad bellumの観点からの手続きが評価されている。また、小松志朗氏は、論考「人道的介入の正統性と実効性のパラドックス」において、主要介入国間のコミュニケーションのギャップが非効率を発生させることを指摘しているし、大庭弘継は、論考「「保護するべき人々を犠牲に供する」というアポリア」において、リビア介入の消極性を指摘している。高橋良輔氏の論考「リビア介入と国際秩序の変容」では、国際秩序の基軸が主権から人権に変わりつつあることが論じられ、池田文佑氏の論考「他者救済をめぐるグローバル倫理の不可能性について」では、複数の倫理からなるグローバル倫理が最終的には「自壊」することが論じられている。

論説では、気鋭の論客より寄せられた、喫緊のきわめて重要な倫理的問題に関する3本の論考を掲載することができた。寺本剛氏は、論考「科学技術の長期的リスクと世代間の公正」において、原子力発電所を稼働させ続ける限り必ず排出される高レベル放射性廃棄物の処理方法について、倫理的な観点から分析と今後の展望を論じている。石原孝二氏と佐藤亮司氏による共著論考「統合失調症の「早期介入」と「予防」に関する倫理的問題」では、統合失調症に対して早期に介入することが「治療」、「予防」、「支援」のいずれに相当するのかという概念的な問題から、医療化やス

ティグマをめぐる倫理的問題に至るまで、先行研究をサーベイしつつ周到に論点整理が行われている。鶴田尚美氏は、論考「ペットの安楽死における倫理的問題」において、動物が実質的に家族の一員となり始めた昨今の状況下で問題化しつつあるペットの安楽死について、米国での現状報告や先行研究に基づきながら考察している。

社会倫理の基礎では、ベルンハルト・ズートル氏の論考「民主主義におけるキリスト教徒」（和訳）を収録した。キリスト教社会理論と政治教育の関わりについて論じられたこの論考を山田秀氏に翻訳していただいた。編集委員としては、カトリック大学の中にある研究所として、重要な知的リソースを提供することができたと考えている。

今号より新たに設けた社会倫理の資料の記念すべき第一弾は、第2回社会倫理研究奨励賞受賞者である環境倫理学者の吉永明弘氏の手による「日本語で読める世代間倫理文献リスト」である。環境問題、原子力発電所問題などの文脈でその重要性がより明確に指摘され始めた現状にあって、時宜を得た研究の基盤となる資料が提供されている。

また、数年間にわたり重点化を図ってきた書評では、12冊の新刊書に対して寄せられた力のこもった書評群をお届けすることができた。書評の対象となった研究書のジャンルは、国際法、近代日本の精神史、厚生経済学、環境倫理、科学技術と倫理、脳神経倫理、科学史、依存症研究、政治学等、多岐にわたっている。なお、今号より新刊紹介として新刊書を手短に紹介するコーナーを設けた。今号では1冊のみの紹介となったが、次号以降、より多くの社会倫理に関連する書物を紹介していく予定である。

最後に、すでにお気づきのことと思われるが、今号から、従来の縦書きから横書きへと体裁を変更することとなった。本誌は、2004年に刊行された第16号以降、PDF形式でウェブ上でも公開されていることから、電子コンテンツとしての読みやすさを考慮したという事情もある。誌面の印象は少し変わったかもしれないが、今後も充実した内容をお届けしたいと考えている。変わらぬご愛顧をお願いしたい。

大庭弘継、鈴木 真、奥田太郎